



iwork-pro.jp

クリックして
Webサイトへ
アクセス

アイワーク News

iwork News Vol.14



長い仕事の

Nagai shigoto no
Mijikai hanashi

短い話



対面で開催されるようになっていた。

弊社の制作物は、企画から納品まで長くて半年（前年の6月くらいにスタートして翌年2月納品）、早いものでも1ヶ月が精々である。デザイン制作のみの場合になると、ぐーんと期間は短縮され極端な場合は「今日言って明日納品」というケースもあったりする。

この範疇からはみ出した制作物を今春完成させ納品した。民間企業の社史がそれである。団体史や記録集は、何冊も手掛けてきたが民間で中堅規模の社史は、前職時代以来の久しぶりとなった。

それは、2021年7月2日（金）、私がまだ大学院に通っていた頃のこと。授業帰りの電車の中で「2023年12月16日で創業から40年を迎える、創業メンバーを中心に社員教育用に自社の歴史をこの機会にまとめてみたい」と懇意にしている会社の相談役から話を持ちかけられた。（会社相談役もこの当時「マーケティング戦略」の科目を受講しており毎週一緒だった）。コロナ禍ではあったが、この頃は小人数の授業は

勢い、社史制作の目的、制作委員会の設置、制作委員の業務内容など社史制作のアウトラインを俯瞰した提案を送り進捗を捗るがコロナ禍とあって、長く膠着状態が続く。漸く動き始めたのが感染者数の減少する2023年の2月頃からであった。

最初に、確かめたのが社史制作のリリースとなる資料のありかと予算と体制。無理をしない、有モノので制作することにした。

有モノは、年表と手持ち画像と創業メンバーの座談会。年表と写真に見る社史をコンセプトに、それを素材にデザインラフを起こし、スケジュール（2023年11月末納品）と予算をこの時に提案する。そこから完成までに校正回数は10回を超え、1年余りをかけて、今年3月に納品となった。

時間を要した要因は、有モノでなかったモノを受け入れてきたことにある。デザインが整い始めるとこうした傾向が一層強くなる。

新聞社のアーカイブの活用（写真に見るページの充実／検索に申請手続きに執筆者許諾等）、略史コンテンツの追加、全職員の40周年メッセージも途中から登場もした。柔軟な対応である。

話を持ちかけられてから2年と8ヶ月かかった長い仕事、何度も何度も息切れしたがしつかりした職員たちに支えられ完成した。そして今、同じように数年がかりの案件を2本抱えている。もう誰かに引き取ってもらおうかと考えている。



“リーダーしっぽ”
代表取締役社長 福原
T.FUKUHARA



← 社史に掲載した新聞史料

俺にかけてくる
プレッシャーを
自分にもかけてみる。



そうすれば人生は
平凡でなくなるはずだ。

これはとある若手人気レスラーの言葉です。彼は今年、活動の場を一時的に海外から日本へ移しました。その過程でヒールターン(悪役化)したことがファンに受け入れられず、SNS等で誹謗中傷を受けたようです。

これは現代の社会問題ですね。インターネット上には誹謗中傷があふれています。彼が言うように、自分に置き換え考えてみる。自らの目標を持ちそれにエネルギーを注いでいけばいたずらに他人を批評し傷つけることはない、ということでしょうね。



つい「推し」を
買いました

プロレスから学ぶレスラー名言。レスラーそれぞれが自分らしく戦っている姿は勇ましく、言葉に説得力があります。もはや現代のモヤモヤに一石を投じる!?

またどこかでお付き合いください。

勝手に
プロレス
名言集
VOL.1

この春、プロレスファン3年生になったデザイナー田部がいつかどこかで役に立つ!? プロレスラーの名言をお届けします。



一瞬で変わるっていうのは
毎日、毎回、小さく積み重ねて
きたものが築かれた瞬間だ。
何もしていない人がいきなり物事を
ひっくり返すほどの評価を得ることはない。



この言葉には大変共感しました。デザイナーを志した頃から芸大受験に向けてデッサンは何百枚と描きました。受験対策だけでなく進学後も、例えば画像の合成は「コピペではなくデッサンする」と学びます。ピントをどこに合わせるか、遠近感・立体感・質感まで意識する。マンガ学科の友人は1日20体の人物クロッキーが課題だと言っていました。もちろん、そうした基礎的な鍛錬の積み重ねは自らアピールすることではありません。併せて、人間ならではの心配りが大切だということは、生成AIに向かって叫びたい気分ですが(いずれお株を奪われそうなので...)

肩の荷が重いというが
その荷物を喜んで受け入れ
誇りを持って背負っていきたい。
プレッシャーを背負えるのは特別な存在だから。



これは説明の必要はありませんね。自然災害やコロナ禍を経て、日々挑戦できる喜びを忘れず精進したいと思います。